

V2章 古語の時相－過去を中心に－

古語の時相について次の順序で説明します。過去が中心になります。

V2.1 時相と確率 (22)

基本的概念である「時」, 「相」, 「確率」について説明します。

V2.2 古語の時相 (24)

時と相と確率の要素で考えます。

[1] 相に重点がある形式 (24)

(1a) 完了を示す「つ」と「ぬ」 (25)

(1b) 完了の結果状態を示す「り」と「たり」 (26)

(1c) 現代語の「た」 (28)

(1d) 「つ」「ぬ」「り」「たり」の活用 (29)

[2] 時に重点がある形式 (30)

「き」「き」は過去を表します。

[3] 時相連合 (31)

(3a) 「てき」と「にき」の異同 (31)

(3b) 「けり」は「き・あり」から (32)

(3c) 「てけり」と「にけり」の異同 (33)

V2.3 現代語の「た」へ (34)

一覧表で, 諸形式が現代語の「た」になったことを示します。

V2.1 時相と確率

時相とは

T1章参照

「時相(じそう)」とは「時(じ・とき)」と「相(そう)」を合わせた語です。

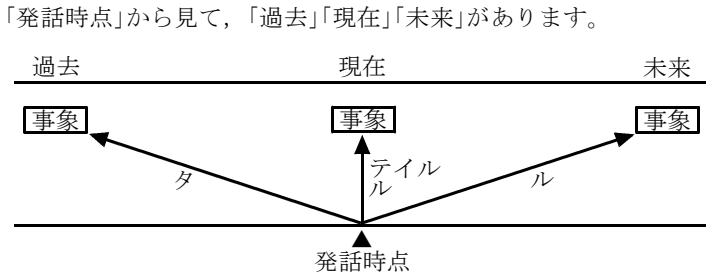
表V2-1 時相 ……相対時は現代語にあり、古語にはないようです。

			古 語	現代語
時相	時 (テンズ)	絶対時	主文・従属節に現れる	
		相対時	古語に相対時なし※	現代語の従属節に現れる
	相 (アスペクト)		開始相・進行相・完了相など、局面を捉える	

※古語の「相対時」は研究が進んでいません。「絶対時」「相対時」についてはT3章参照。

時

…… 古語には「絶対時」のみが存在します。下図は現代語での説明。



図V2-1 時のモデル図 (現代語)

現代語での例

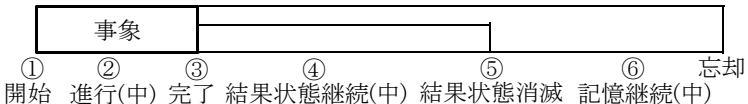
〔過去〕 先週空港へ行った。

〔現在〕 いまコーヒーを飲んでいる(動作)。ここに友人がいる(存在)。
「動作」の現在表現には②進行中の相表現が含まれています。

〔未来〕 兄は来春、商社に入る。

相

…… ある事象の①～⑥の6つの局面を捉えます。



図V2-2 局面のモデル図

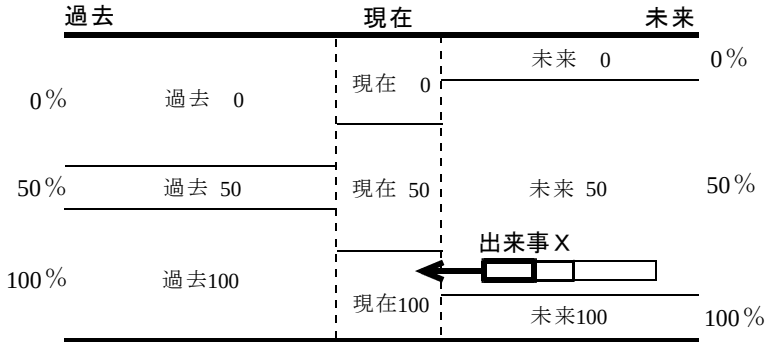
たとえば、「着物を着る」という事象には、①着始める、②着ている、③着終わる、④着ている、⑤着てい終わる、⑥(5年前の成人式に)着ている、の6局面があります。それぞれ、①開始相、②進行相、③完了相……とよぶことができます。

問V2-1 「彼は椅子に座っている。」の時相をいってください。

確率とは

S1.17, A5章, C9.3 参照

「確率」とは、発話者が発話内容の実現性がどの程度確実であると捉えているかということです。時域図で表現します。



図V2-3 確実性(確率)の時域図(水域図)

時を川の流れにたとえれば、事象(出来事)は舟にたとえられます。

未来に舟が浮かんでいるとすると、その舟は、その段階では実現の可能性について3種類に分けられます。

- [未来0] 私は将来、本物の犬になる。(絶対に起こらないこと)
- [未来50] 来週の水曜日は晴れる。(そうなるかもしれないこと)
- [未来100] 明日も東から日が昇る。(必ずそうなること)

現在の事象も3種類に分けられます。

- [現在0] 私はあなたである。(絶対にそうではないこと)
- [現在50] 彼はいま座っている。(そうかもしれないこと)
- [現在100] いまよく晴れている。(現在の事実であること)

過去の事象も3種類に分けられます。

- [過去0] 当時は人が山を動かした。(絶対に起こらなかったこと)
- [過去50] 彼は自宅で生まれた。(そうだったかもしれないこと)
- [過去100] 15歳のまへは14歳だった。(そうだった過去の事実)

上図の出来事Xの舟は「このコインを投げると表が出る」のような、未来50の時域にあります。間もなく現在の「表である」確実な出来事(100)となろうとしています。それが過去になると、過去の確実な出来事(100)ということになります。

問V2-2 「子どもが生まれたら、この名前にする。」の下線部の時域はどこ？

問V2-3 「子どもが生まれて、名前を知らせてきた。」の下線部の時域はどこ？

本節で扱う形式

本節では「過去」を中心とした表現法を扱います。C9.1

[1] 相に重点がある形式

- (1a) 完了を示す「つ」と「ぬ」……前指向の「つ」と、後指向の「ぬ」。
 (1b) 完了の結果状態を示す「り」と「たり」……同じなので「り」はいりません。
 (1c) 現代語の「た」……「たり」が現代語の「た」になりました。
 (1d) 「つ」「ぬ」「り」「たり」の活用……本文法と国語文法の活用表を示しました。

[2] 時に重点がある形式

「き」「き」は「過去」を表します。

[3] 時相連合

- (3a) 「てき」と「にき」の異同
 ……完了の「つ」と「ぬ」に、過去の「き」が付きました。
 (3b) 「けり」は「き・あり」から
 ……過去の「き」に現在の「あり」が付きました。
 (3c) 「てけり」と「にけり」の異同
 ……完了の「つ」と「ぬ」に、「けり」が付きました。

[1] 相に重点がある形式

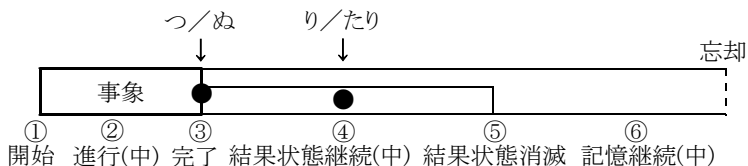
C9.2

相に重点を置く形式は、表現が「完了」か「結果状態」かで2種類に分けられます。

(1a) 局面③(完了)を指すことに重点があるのは「つ」と「ぬ」です。

「つ」……大君、水沼^{みづぬま}を都^{みやこ}となしつ。(大君は沼を都となさった。)

「ぬ」……裳^もの裾^{すそ}、濡^ぬれぬ。(裳の裾が濡れた。)



図V2-4 「つ／ぬ」は③を、「り／たり」は④を指示

(1b) 局面④(結果状態)を指すことに重点があるのは「り」と「たり」です。

「り」……花咲けり。(花が咲いている。)

「たり」…花咲きたり。(花が咲いている。)

問V2-4 「つ」「ぬ」はどの局面を、「り」「たり」はどの局面をさしますか。

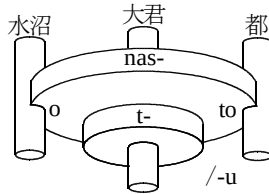
[1] (1a) 完了を示す「つ」と「ぬ」……前指向の「つ」と、後指向の「ぬ」

C9.2

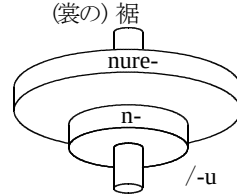
★構造 「つ」「ぬ」の両者とも動詞から生まれた助動詞です。

つ

「つ」は =t- という構造をしています。これは動詞「棄(う)つ ut-u」(「物を意志的に眼前にほうり出してしまう」意) のはじめの母音 u が落ちて生まれました(本書p.2)。作為的・人為的な事象を示す動詞につきます。
大君の₁水沼を都と成しつ (nas-i=t-u) (大君は沼を都となさった)(下左図)



図V2-5 つ t-u



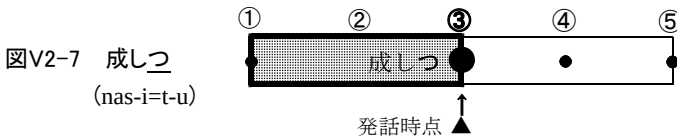
図V2-6 ぬ n-u

ぬ

「ぬ」は =n- という構造をしています。これは動詞「去(い)ぬ in-u」(「眼前にいたものがいつの間にか去って見えなくなる」意) のはじめの母音 i が落ちて生まれました。自然推移的な事象を示す動詞につきます。
(裳の)裾の₁濡れぬ (nure-Ø=n-u) (裳の裾が濡れた／濡れている)(上右図)

★相違点 同じ「完了」③を指しても、「つ」は前指向、「ぬ」は後指向です。

「つ =t-」……③より前の「事象そのもの②」を重視するので、前指向といえます。



図V2-7 成しつ
(nas-i=t-u)

「ぬ =n-」……③よりあとの「結果状態④」を重視するので、後指向といえます。



図V2-8 濡れぬ
(nure-Ø=n-u)

「つ」は「動作の完了」を表し、「ぬ」は「状態の発生」を表す、ともいえます。

動詞「鳴く」は、「つ」も「ぬ」も取りますが、意味が異なります。

うぐひす鳴きつ …… うぐいすが鳴いて、それが今終わった。

うぐひす鳴きぬ …… うぐいすが鳴いて、その季節になった。

問V2-5 「散らしつ」と「散りぬ」の違いは何ですか。

[1] (1b) 完了の結果状態を示す「り」と「たり」……「り」はいらない

C9.2

★構造、指示する局面

[り]

「り」は $-i=ar-i$ の構造をしています、 $-er-i$ と発音されます。花₀₁ sak-i=ar-i 花₀₁咲きあり

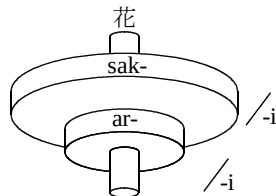
↓ (ia が e と発音されます。)

花₀₁ sak- e r-i 花₀₁咲けりこの $-i=ar-i$ は sak-(咲く), tat-(立つ)

などの子音末動詞に付きます。

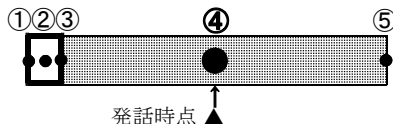
「咲く sak-」が「ある ar-」ことを示すので、咲くことの実現、特に局面④を表す機能をもっています。

「花咲けり」……「花が咲いて、いま咲いた状態にある。」



図V2-9 花咲けり

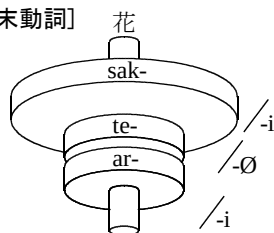
図V2-10 「り」



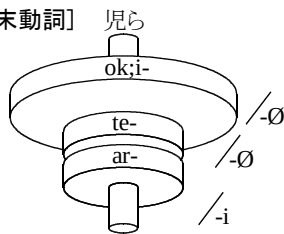
[たり]

「たり」は「り」の構造に $te-$ が入って $-(i)=te-\emptyset=ar-i$ (てあり)の構造をしています、発音では te の e が省略されて $-(i)=t-\emptyset=ar-i$ (たり)となります。
 $=te-$ が③(か①)の局面を指しますので、 $-(i)=t-\emptyset=ar-i$ は局面④を表します。
 子音末動詞にも、母音末動詞にも付き、事象の実現後を表します。

[子音末動詞]

花₀₁ sak-i=t- $\emptyset$ =ar-i
図V2-11 花咲きたり

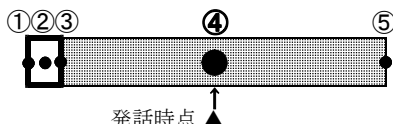
[母音末動詞]

見ら₀₁ ok;i- $\emptyset$ =t- $\emptyset$ =ar-i
図V2-12 見らきたり

「花咲きたり」……「花が咲いて、いま咲いた状態にある。」(局面④)

「見らきたり」……「見らが起きて、いま起きた状態にある。」(局面④)

図V2-13 「たり」



※「り」も「たり」も、局面②，③を指すと解釈できる場合もあります。

「り」……②「思へり」，③「(歌)詠めり」

「たり」……②「ひかりたり」，③「入れたり」

この場合，「たり」の=te- は局面③ではなく局面①を指します。

★「たり」があれば「り」はいらない

「り」と「たり」は，前ページの図V2-10と-13で明らかなように，同じ局面④を表しています。同じ局面を表すならば，「り」か「たり」かどちらか1つあればよいはずです。それで，比べてみます。

「り」……子音末動詞には付きますが，母音末動詞には付きません。

[子音末動詞]	sak-i= <u>ar</u> -i	→ sak- <u>er</u> -i	咲け <u>り</u>
	tum-i= <u>ar</u> -i	→ tum- <u>er</u> -i	摘め <u>り</u>
	kudak-i= <u>ar</u> -i	→ kudak- <u>er</u> -i	砕け <u>り</u>
[母音末動詞]	*ok;i- <u>Ø</u> =ar-i	→ ×	起き <u>あり</u>
	*kudak;e- <u>Ø</u> =ar-i	→ ×	砕け <u>あり</u>

「たり」……子音末動詞だけでなく，母音末動詞にも付きます。

[子音末動詞]	sak-i=t- <u>Ø</u> =ar-i	咲き <u>たり</u>
	tum-i=t- <u>Ø</u> =ar-i	摘み <u>たり</u>
	kudak-i=t- <u>Ø</u> =ar-i	砕き <u>たり</u>
[母音末動詞]	ok;i- <u>Ø</u> =t- <u>Ø</u> =ar-i	起き <u>たり</u>
	kudak;e- <u>Ø</u> =t- <u>Ø</u> =ar-i	砕け <u>たり</u>

つまり，局面④を表すには，「たり」があれば十分です。制約のある「り」は奈良時代から「たり」に統合される傾向が生じ，中世にほぼ統合されました。

基幹

本書p.29でこの用語を使います。

本文法では，「読む」の yom- を動詞といい，yom-u を動詞語とといいます。一般には yom- を「動詞語幹」といいます。本書では yom- を「動詞(語幹)」と表示します。

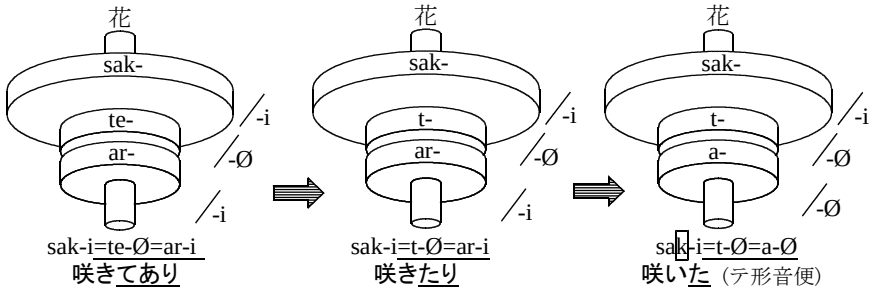
本文法では，「(し)ます」の =mas- を「助動詞」といいます (ほかに =t(e)-, =a(r)-, =t-, =n- が助動詞です。『文法』10章)。助動詞なので，yom-i=mas-u のように動詞に付けて使います。この =mas- を「助動詞(幹)」ということにします。

また，本文法では，「た =t-Ø=a(r)-Øu」は「基」なので，=t-Ø=a(r)- は「基幹」ということになります。つまり，「基」の語幹のような部分が「基幹」です。

問V2-6 「散らせり」と「散らしたり」の違いは何ですか。

[1] (1c) 現代語の「た」

「てあり」から「たり」が生まれ、「たり」から現代語の「た」が生まれました。

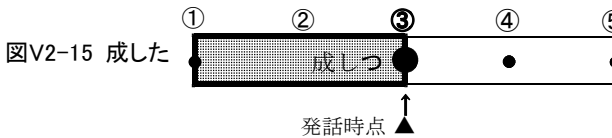


図V2-14 「てあり」から「たり」へ、そして「た」へ

「つ」も「ぬ」も「たり」も現代語では「た」で表現します。つまり、「た」は局面③も局面④も表します。（「た」は「局面変化完了認知基」です。T1.5参照。）

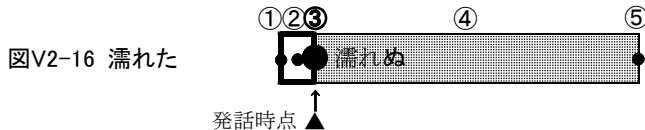
局面④は「咲いた花」のように名詞を修飾するときに理解しやすくなります。

「つ」…… 大君の1水沼を都と成しつ (nas-i=t-u) → 成した (nas-i=t-Ø=a-Ø)



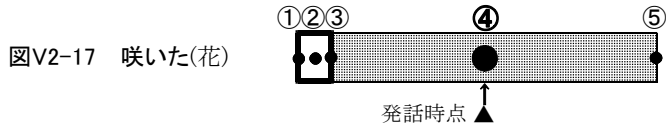
図V2-15 成した

「ぬ」…… (裳の)裾の1濡れぬ (nure-Ø=n-u) → 濡れた (nure-Ø=t-Ø=a-Ø)



図V2-16 濡れた

「たり」…… 花咲きたり (sak-i=t-Ø=ar-i) → 咲いた (sak-i=t-Ø=a-Ø) (テ形音便形)

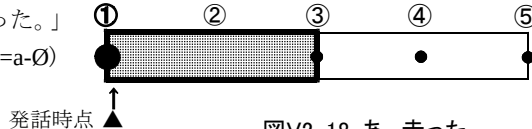


図V2-17 咲いた(花)

現代語では、「た」はさらに①も表します。

(開始後)「あ、走った。」

(hasir-i=t-Ø=a-Ø)



図V2-18 あ、走った

問V2-7 「読んだら分かる」の「ら」について説明してください。

[1] (1d) 「つ」「ぬ」「り」「たり」の活用

「基幹」は本書p.27参照。

「t;e」「ur」は動詞「棄つ」「去ぬ」のときに語幹化した「許容態」を表します。
 (『発展B』p.60)
 なじみのある国文法の活用表の形をかりて活用を示します。(S1.13)

つ 「つ」の基幹は3種類ありました。 (動詞「棄つ ut-u」の「棄 u」を省略)

- (1) t;e- この形には (-m-), -Ø, -Ø=yo が付きます。
- (2) t- この形には -u が付きます。
- (3) t;ur- この形には -u, -e が付きます。

表V2-2 「つ」の活用表

成しつ nas-i=t-u

	(未然形)	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
本文法	= <u>t</u> ; <u>e</u> -(<u>m</u> -)	= <u>t</u> ; <u>e</u> - <u>Ø</u>	= <u>t</u> - <u>u</u>	= <u>t</u> ; <u>ur</u> - <u>u</u>	= <u>t</u> ; <u>ur</u> - <u>e</u>	= <u>t</u> ; <u>e</u> - <u>Ø</u> = <u>yo</u>
国文法	て	て	つ	つる	つれ	てよ

ぬ 「ぬ」の基幹は2種類ありました。 (動詞「去ぬ in-u」の「去 i」を省略)

- (1) n- この形には (-amu), -i, -u, -e が付きます。
- (2) n;ur- この形には -u, -e が付きます。

表V2-3 「ぬ」の活用表

濡れぬ nure-Ø=n-u

	(未然形)	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
本文法	= <u>n</u> -(<u>amu</u>)	= <u>n</u> - <u>i</u>	= <u>n</u> - <u>u</u>	= <u>n</u> ; <u>ur</u> - <u>u</u>	= <u>n</u> ; <u>ur</u> - <u>e</u>	= <u>n</u> - <u>e</u>
国文法	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね

り 「り」の基幹は i=ar- です。これが -er- と発音されました。

表V2-4 「り」の活用表

咲けり sak-i=ar-i

	(未然形)	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
本文法	<u>i</u> = <u>ar</u> -(<u>amu</u>) - <u>er</u> -(<u>amu</u>)	<u>i</u> = <u>ar</u> - <u>i</u> - <u>er</u> - <u>i</u>	<u>i</u> = <u>ar</u> - <u>i</u> - <u>er</u> - <u>i</u>	<u>i</u> = <u>ar</u> - <u>u</u> - <u>er</u> - <u>u</u>	<u>i</u> = <u>ar</u> - <u>e</u> - <u>er</u> - <u>e</u>	<u>i</u> = <u>ar</u> - <u>e</u> - <u>er</u> - <u>e</u>
国文法	ら	り	り	る	れ	れ

たり 「たり」の基幹は t-Ø=ar- です。

表V2-5 「たり」の活用表

咲きたり sak-i=t-Ø=ar-i

	(未然形)	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
本文法	= <u>t</u> - <u>Ø</u> = <u>ar</u> -(<u>am</u> -)	= <u>t</u> - <u>Ø</u> = <u>ar</u> - <u>i</u>	= <u>t</u> - <u>Ø</u> = <u>ar</u> - <u>i</u>	= <u>t</u> - <u>Ø</u> = <u>ar</u> - <u>u</u>	= <u>t</u> - <u>Ø</u> = <u>ar</u> - <u>e</u>	= <u>t</u> - <u>Ø</u> = <u>ar</u> - <u>e</u>
国文法	たら	たり	たり	たる	たれ	たれ

問V2-8 「咲けり」の「り」は、命令形の「咲け」に付いているのですか。

問V2-9 「植ゑつる花」と「植ゑたる花」の違いは何ですか。

[2] 時に重点がある形式

C9.3(3)

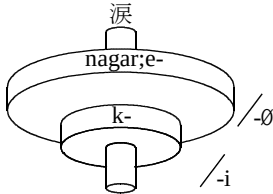
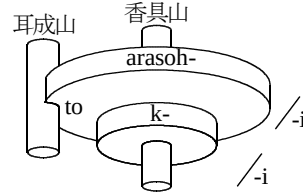
き 過去の時(テンス)を表現する形式は「き」です。

(1) 涙ながれき

nagar;e-Ø=k-i -(i)=k-i

(2) 香具山Ø₁は耳成山と争ひき

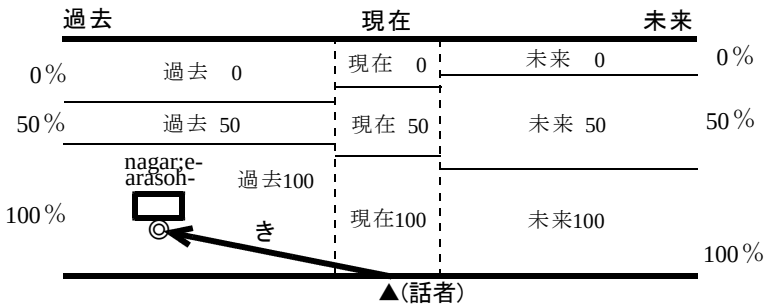
arasoh-i=k-i -(i)=k-i

図V2-19 涙Ø₁ nagar;e-Ø=k-i図V2-20 香具山Ø₁ arasoh-i=k-i

※「き」は「来」の古い終止形と考えられますので、k-iと表示します。

★「き」は、(1)のように、話し手の過去にあった直接的体験を回想して述べるのに使用されるので、事象の舟は下図のように過去100にあります。

(2)のように自分の直接経験していない事象や、架空の事象について用いられる場合には、その事象が確かに過去にあったことだと強調する意図をもつこともあります。「修辭的な過去100」といえます。



「◎」は事象を相で扱わないで、事象そのものとして扱うことを意味しています(T1.2)。

図V2-21 事象の舟が[過去100]の時域にある場合

表V2-6 「き」の活用表

	(未然形)	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
本文法			=k-i	=s-i	=s-ika	
国文法			き	し	しか	

「し」「しか」は構造が未詳なので、推測表示です。

問V2-10 「ありし人」「ありつる人」の違いを説明してください。

[3] 時相連合

……時と相を組み合わせて表現する形式

C9.3(3)

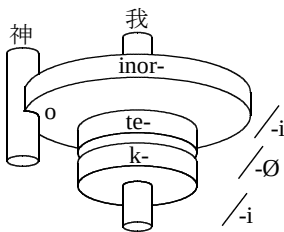
[3] (3a) 「てき」と「にき」の異同

形式中の「て」と「に」は完了相(局面③)を表し、「き」は過去(時)を表します。

てき =te-Ø=k-i

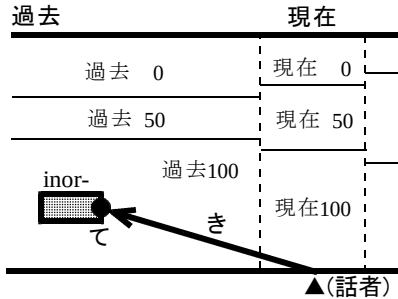
「て」は「つ」(の連用形)です(本書p.29)から、意味的には「前指向」です。
ある事象が過去に生起して、すでに終わったことを意味します。

神を祈りてき <神に祈った>



inor-i=te-Ø=k-i

図V2-22 我の神を祈りてき

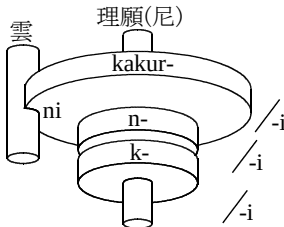


図V2-23 祈りてき

にき =n-i=k-i

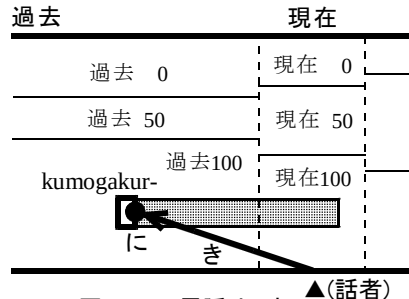
「に」は「ぬ」(の連用形)です(本書p.29)から、意味的には「後指向」です。
ある事象が過去に生起して、すでに終わりました。その結果状態が過去に始まりました。(次例の「理願」は尼の名です。)

理願の雲隠りにき <理願は死んだ(いまはいない)>



kumogakur-i=n-i=k-i

図V2-24 理願の雲隠りにき



図V2-25 雲隠りにき

問V2-11 「てき」「にき」は何を表現しますか。

問V2-12 「祈りつ」「祈りてき」の違いを説明してください。

[3] (3b) 「けり」は「き・あり」から

C9.3(4)

けり

=k-i=ar-i き・あり

↓ ↓
=ker-i けり

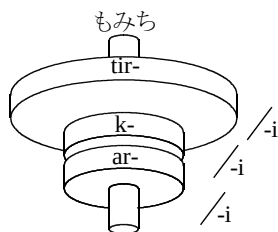
図V2-26 けり

左図参照。「来有り=k-i=ar-i」の下線部の母音 i と a が結合して e となり、「けり=ker-i」が誕生しました。「事態の成り行きがここまで来ている」と、今の時点で認識するのが基本的意味です。

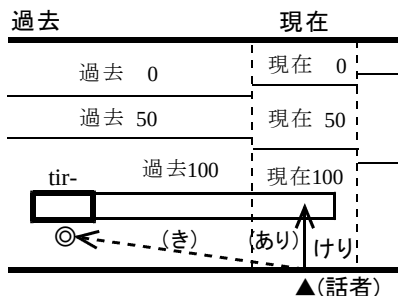
現在に見る過去で、次の (1), (2) があります。

- (1) ・初めて気づいた驚きを表すために主観的に述べる
・比較的客観的に述べる

もみちの₁散りけり <散っている>



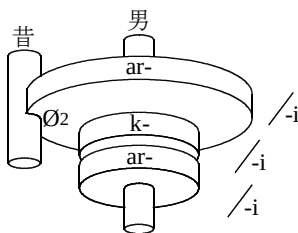
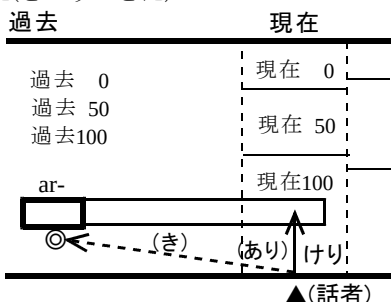
図V2-27 散りけり



図V2-28 散りけり

- (2) ・真偽は問わず伝聞として表現する
……真偽は問わないので、過去の確実性のところはあいまいのまま。

昔、男の₁ありけり <男がいた(ということだ)>

図V2-29 男の₁ありけり図V2-30 男の₁ありけり

たりけり

「たり+けり」が現代語の「たっけ」になりました。「よく歌ったっけ」

問V2-13 「もみち散りぬ」と「もみち散りけり」の違いを説明してください。

問V2-14 「男ありき」と「男ありけり」の違いを説明してください。

[3] (3c) 「てけり」と「にけり」の異同

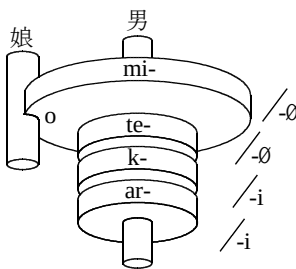
C9.3(4)

てけり

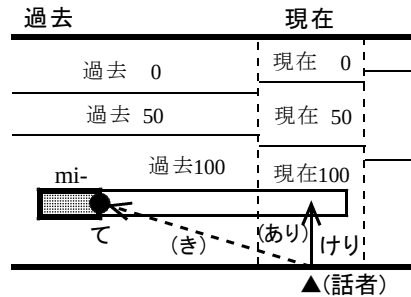
動詞に「て(=つ)」が付くので、前指向です。意図的・作為的になされた行為そのものを回想します。「した」「してしまった」「しておいてある」の意味。

娘を見てけり

<娘を見てしまった>



図V2-31 mi-Ø=te-Ø=k-i=ar-i



図V2-32 見てけり

てんげり

「てけり」の語勢を強めるために「ん」を入れた「てんげり」の形が鎌倉時代から江戸・前期まで使われました。

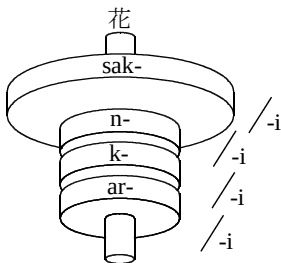
ふところへ引き入れてんげり <引き入れてしまった>

にけり

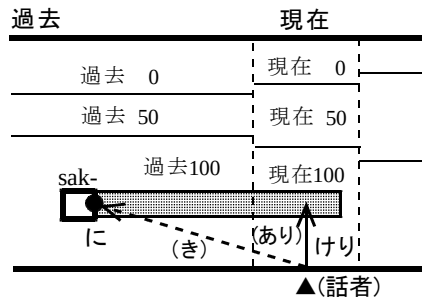
動詞に「に(=ぬ)」が付くので、後指向です。動作・作用の完了を過去のこととして述べます。その結果の状態が発話時点まで残っていることを感慨を込めて表したり、あらたに気づいたこととして表したりします。

花の咲きにけり

<花が咲いている／咲いているなあ>



図V2-33 sak-i=n-i=k-i=ar-i



図V2-34 咲きにけり

問V2-15 「食ひてけり」はどんな気持ちを表していますか。

問V2-16 「(都のてふり)わすれにけり」はどんな気持ちを表していますか。

V2.3 現代語の「た」へ

以上に見てきた過去を表すいろいろな形式は、現代語ではタで表現されるようになりました。その状況を表の形にして示しておきます。ここでは原則的なことを示すのが目的なので、極度に単純化しており、細かいことには触れていません。

なお、現代語の「た」は「てあり」から生まれました。本書p.28参照。

表V2-7 古語の過去表示が現代語の「た」へ(1) 〈 〉の数字は時相を示します。

時相種類	形式	図示	現代語へ
[1] 相重点	つ ↓ た <3>		成し <u>つ</u> 成した 事象指向のタ (前指向のタ)
	ぬ ↓ た <3>		濡れ <u>ぬ</u> 濡れた 結果状態指向のタ (後指向のタ)
	り ↓ た <4>		咲け <u>り</u> 咲い <u>た</u> /咲い <u>ている</u> 結果状態のタ・テイル
	たり ↓ た <4>		咲き <u>たり</u> 咲い <u>た</u> /咲い <u>ている</u> 結果状態のタ・テイル
[2] 時重点	き ↓ た <6◎>		争ひ <u>き</u> 争っ <u>た</u> 過去事象のタ

問V2-17 上の両表に示された古語の時相表現の大部分が、現代語では「た」で表現されるようになりました。現代語の「た」との対応関係を示してください。

前ページの表には [1][相重点] と [2][時重点] の表現を載せましたが、このページの表には [3][時相連合] の表現を載せます。

表V2-8 古語の過去表示が現代語の「た」へ(2)

時相種類	形式	図示	現代語へ
[3] 時相連合	てき ↓ た <63>		祈り <u>てき</u> 祈った 過去完了のタ
	にき ↓ た <43>		雲隠り <u>にき</u> 雲隠れした 過去完了状態発生のタ
	けり ↓ た <4◎>	[気づき／比較的客観的な場合]	散り <u>けり</u> 散った・散っているなあ [過去事象＋感慨]のタ
		[真偽不問伝聞の場合]	あり <u>けり</u> あったということだ 過去事象伝聞のタ
	てけり ↓ た <43>		見て <u>けり</u> 見た／見てしまった [過去完了＋感慨]のタ
	にけり ↓ た <43,44>		咲き <u>にけり</u> 咲いた・咲いているなあ [過去結果状態発生現在 継続中＋感慨]のタ

コラムV1

形態素に分けられない……国語学の限界

「形態素」とは「意味を持つ最小の言語単位」です。名詞にも動詞にも形容詞にもあります。

名詞の形態素は、たとえば、「ゆき(雪)」や「かお(顔)」などです。

動詞の形態素はローマ字で示すのが適切です。yom- (読む) や mi- (見る) など、これらは実際に使うときは -u (-ru) や、-i (-Øi) や、-oo (-yoo)などを伴い、yom-u や、mi-yoo のようにします。

yom- や mi- にも意味があるのです。でも、-u や -i、-oo にも意味はあるのでしょうか。ちょっと考えればすぐに分かります。yom-u と yom-i, yom-oo では意味が異なりますから、-u や -i, -oo にも意味はあるのです。

形容詞の形態素もローマ字表示が適切です。「赤い」という形容詞は、aka.k-i というように形態素分析できます。理由は『日本語のしくみ(3)』に書いてあります。

国語学辞典の説明するのは、名詞関係だけの形態素です。どんな国語学・日本語学辞典でも、形態素を説明しているのは名詞関係についてだけです。動詞や形容詞も、扱うのは名詞形だけで、形態素そのものについての説明はありません。

ということは、現在の国語学者は動詞や形容詞を形態素分析することはできないということです。「読みます yomimasu」を形態素に分けてください、と言っても yo-mi-masu なのか yo-mi-ma-su, yomi-masu, yom-imasu, yom-imas-u, yom-i-mas-u なのか決められないということです。甚だしい場合は、そんな分析に何の意味があるのか、と言います。(私はある研究者が論文の中で、ここにある -i を誇らしげに「無意味形態素」とよんでいるので、びっくりしました。)……形容詞「赤い」を形態素分析したとしても、中に .k- があるなどとは思いつかないでしょう。

国語文法の研究は成熟しきっていて、もう若い人が入り込む余地はないという意見もあります。ほんとうにそうでしょうか。実際は国語文法の研究は行き詰まっているのです。本書でお分かりのように、やるべきことはたくさんあるのですが、国語学ではもう限界なのです。動詞や形容詞の形態素分析ができないからです。

形態素分析ができないのは「ひらがな」で文法を考えているからです。ひらがなで文法を考えるのは、人間を考えるのに、個人を考察の対象にしないで、家を単位に考察していることに似ています。ローマ字で考えれば、yom- と -u の機能を個別に検討することができますが、ひらがなでは、「よ」と「む」に分けるか、「よむ」全体を1つの単位とするかにせざるを得ないわけです。文法要素、つまり「個人」を個別に扱うことができず、その入った「家」全体を見るしかないわけです。

問V2-18 国語文法では「読む」の仮定形は「読め」です。なぜこうなるのですか。